

普及項目	養殖
漁業種類等	貝類養殖
対象魚類	シカメガキ
対象海域	八代海

県南地区におけるクマモト・オイスター養殖指導及び飼育試験について

県南広域本部水産課・野村 昌功

【背景・目的・目標（指標）】

クマモト・オイスターについては、夏場の高水温期における大量死が課題となっていたが、温湯処理技術が開発されたことにより越夏養殖が可能となってきた。

しかし、芦北地区では、温湯処理を導入し生残率は向上したものの、安定した出荷数量を確保できるまでには至っていないため、今年度は、さらなる生産性の向上に向け、生産者に温湯処理の徹底を指導するとともに、海況に適した新たな養殖方法の探索を目的とした。

【普及の内容・特徴】

（１）一定間隔の温湯処理作業の厳守

令和４年度は、温湯処理は徹底したものの、赤潮の影響と推察される大量へい死が発生した。そこで、温湯処理の有効性を確認するために、再度温湯処理の徹底を指導した。

（２）陸上避難水槽の有効性の確認

赤潮発生時に地下海水を用いた陸上水槽へ飼育貝を避難させることについて、生産者と協力してその有効性の検証を実施した。

（３）干潟飼育の有効性の確認

シカメガキの本来の生息地は干潟域であり、また、他地区において干出飼育に関して有効な結果が報告されていることから、芦北町地先における干潟飼育について、生産者と実証試験を実施した。

【成果・活用】

（１）一定間隔の温湯処理作業の厳守

５月１日から３週間間隔で温湯処理の徹底を指導したが、５月下旬から７月にかけて大量死が発生したことから、芦北町地先では、温湯処理だけではへい死を抑えることは困難と推察された。（図１）

（２）陸上避難水槽の有効性の確認

赤潮発生時に陸上水槽に飼育貝を収容することで、へい死を抑えることができた。しかし、長期間（３ヵ月程度）の陸上水槽への収容は、再び海面に戻したときにへい死が発生したため、今後は、収容時期や期間の検討が必要と考えられた。（図２、３）

（３）干潟飼育の有効性の確認

干潟飼育では、筏での垂下式養殖（無干出）と比較して生残率が向上し、更に貝の形状が良くなる傾向が見られたため、今後、干潟飼育による生産性の向上が期待される。（図４、５）

【達成度自己評価】 4 目標（指標）はほぼ達成できた（76～100%）

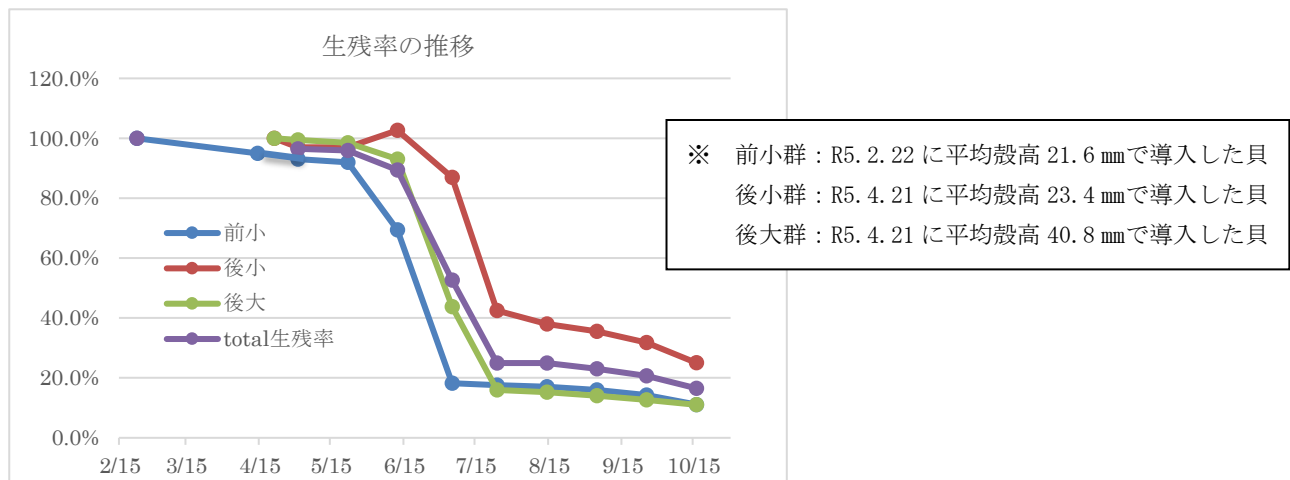


図1 芦北町における試験養殖状況（R5 産）



図2 陸上飼育状況（飼育貝）



図3 陸上飼育状況（水温）



図4 干潟飼育状況（福浦湾奥）



図5 干潟飼育状況（佐敷港）